

氏名・(本籍地)	三 浦 周 (東京都)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第44号
学位授与の日付	平成20年3月15日
学位論文題目	養鷺徹定の排耶論研究
論文審査委員	主査 大南 龍昇 副査 多田 孝文 副査 廣澤 隆之

三 浦 周 氏 学位請求論文審査報告書

「養鷺徹定の排耶論研究」

論文の内容の要旨

本論文は養鷺徹定(以下「徹定」)の『關邪管見録』を中心に据えて近代仏教における特徴の一つである排耶論を考察するものである。第1章では数少ない先行研究を精査し、従来の排耶論研究を概観し、そのうえで論者の研究方法を確定する綿密な論述がなされている。まず従来の研究における視点として三つを挙げる。まず仏教とキリスト教を対比する比較(思想)史研究、次にキリスト教の立場からの歴史認識にもとづくもの、そして近代的な仏教観にもとづく非近代性を告発するものを考察し、その研究の限界を指摘する。そこで論者は排耶論研究の独自の立場を確立するために、排耶(論)そのものの概念規定をし、研究の視座を確定する。そこで排耶論は「キリスト教批判」あるいは「キリスト教排撃」のために書かれたものではなく、「耶蘇」に仮託して近世～近代における社会不安が生み出した受け入れがたい事象への反応であり、それは人々が不安を「耶蘇」に仮託し、その心的状況を投影させたものを排除しようとする意図をもつものと理解する。このような「耶蘇」理解に基づいて排耶論とされる書物を分類する。そしてそれらの書物に共通して「耶蘇」に仮託される事実に注目し、それらがいわゆる「正史」に上らない「稗史」に属する事象であることに注目し、そのような「稗史」として既述されたものを読み解く方法としての江戸期の荻生徂徠以来の古学の方法論に注目した。それは徹定が儒者的知識人であることを念頭においた着目点である。このような視座を得る根拠を近世～明治初期の排耶論の分類と徹定の排耶論の特質に求めている。

徹定は複数の排耶論書を著しており、先行研究では他の書物に負って論じてきているが、本論文では最初に書かれた『關邪管見録』に注目している。その理由は、この書が中国・日本の排耶論の資料を多数収集していること、そして後の徹定の排耶論の原型となっているからであるとする。

さてその特質だが、通俗的な言説で流布された「耶蘇」イメージを知識人相手に社会秩序の崩壊者としての「耶蘇」として再構成し、護国を前面に出す近代仏教共通の課題としている。しかも、尊皇の志士たちが懐いていた憂国の心情をも共有すると指摘する。しかもそこに「耶蘇」に対する国家のレベルの態度

を確定する当為を「常の思想」として提示する。「常」とは社会的変動に揺るがない儒教的倫理を核とする永遠なるものであり、その思想から当為が導かれる。

明治初頭において最も盛んであり、排耶論の主流であった真宗排耶論がキリスト教情報の収集に特徴があったのに対し、徹底のそれは、過去から伝えられた「耶蘇」の概念を現代の社会状況についての危機意識の中で再構成し、過去の成るものが現代を規定するという歴史認識をもつものであった。そこには儒教における「古」を「史」として記す「志」の歴史への態度が徹底にも貫かれていたといえる。このようにして「耶蘇」は徹底的に排除されるべき対象とされるのである。

それではこのように対象化される「耶蘇」とは何か、ということが本論文を貫く大きなテーマである。それについて本論文では常識的な観念となっている「耶蘇＝キリスト教」とできる根拠はないとする。むしろ通俗的に流言飛語によってもたらされた社会における阻害要因を「耶蘇」として排撃する日本の文化土壌が生み出したものであり、それは「内なる耶蘇」といえるものであるというのが、本論文の主旨の核になっている。

審査結果の要旨

本論文の最も評価すべき点は独自の視点からテキストを読み解く態度が一貫しており、それゆえその点から展開された論は趣旨・論述の筋道にブレがないことである。それゆえ、先行研究をしっかりと踏まえながらも、本論文はきわめて独創性の高いものとなっている。とりわけ、「耶蘇」とは何かという概念把握もきわめて明確であり、独創的な理解であり、学会への問題提起としても評価できる。

ただし、姉崎正治の宗教研究からヒント得て、「耶蘇」とは社会状況への不安がもたらした「胡乱なるもの」が投影したものであり、キリスト教ではないとするが、そのような社会を阻害する要因を含めて制度化された宗教は存在するのであり、また多くの場合にある宗教が排撃されるのは教義の側面より、その社会的機能であるから、本論文の背後には「そもそも宗教とは何か」という深刻な問題が控えている。しかし、宗教の規定がやや曖昧なまま論が進められているので、将来の研究ではさらに宗教研究の方法・視点についての自己検証を望むところである。

この「耶蘇」を独自に概念把握した本論文の独創性を高く評価しながらも、3名の審査員がそれぞれにその主張の核心部にそれぞれの立場から質問と見解を述べた。そのことから明らかなように、本論文の中心課題は「耶蘇」とは何かを問う過程で論述されている。

また、本論文では徹底の排耶論を「史的排耶論」と規定する点も独創的である。その根拠として、儒学における歴史認識を探究し、荻生徂徠などの江戸期の古学の歴史理解に注目し、「儒者」としての徹底イメージを浮かび上がらせ、儒学における歴史認識を吉川幸次郎などの理論を援用して理論補強するなど、仏教学において今まで採られなかった方法を試みていることも独創的であり、評価できる。ただし、ややもすると、この視点からのテキスト理解が支配的であるために、テキストにおける仏教的概念を看過していることが気になる点である。

この問題を敷衍すると、本論文が仏教的テーマを真正面から取り扱っていないように感じられる。そもそも浄土宗に所属する徹底という一人の僧侶の「儒者」（渡辺海旭の評価）としての側面を強調したために、浄土宗の教義や通仏教的な僧侶の世界観などから排耶論を検証する論述が希薄になっている。本論文では先行研究が仏教的立場からのキリスト教との対論という理解であるのをそのまま受けとめずに、それを批判して独自の立場を強調するあまりに、仏教的側面を看過していることは、たいへん惜まれる。将

来の研究においては仏教学からの再検証が望まれる。

本論文が中国あるいは江戸期の儒学を中心とした知的世界を学問の中に取り込んでいることを評価するが、体系だった理解になっているかどうか、あるいはその知識が深い認識と結びついているかどうか、いささかの疑問がある。

さらに、「耶蘇」が西洋の反宗教改革の過程で植民地主義と結びつき政治的・経済的・軍事的側面を強く印象づけて日本で理解されたことを把握し、それが近代になるとプロテスタントのもたらす近代科学と文明開化への当時の日本の知識人の反応をきちんと洞察している点が評価された。ただし、欲をいえば、その理解をさらに深めるためには西洋における近世～近代のキリスト教の歴史認識と神学のテーマも視野に入れておけば、さらに洞察が深くなったであろう。

最後に、本論文が仏教学研究科に提出されたが、その論旨からいえば、他の宗教学あるいは歴史学の領域の論文として評価される点が多々ある。それゆえ、仏教学の論文としては異彩を放つが、そのことを仏教学の無視と評価せずに、さまざまな学際的研究への通路を拓くものと評価したい。審査委員からも、このような学際的研究のプロジェクトを組織するように要請があったのも、本論文が従来の仏教学の領域を超えるもので、学位に値するとの高い評価につながる。